イスラームの食物規範

小田淑子

要旨

イスラームの食物規範は単純である。クルアーンでは、豚肉食と飲酒の禁止、他の食肉はアッラーの名を唱え頸動脈を切断する屠殺方法によることのみが定められている。それが今日の日本で非常に煩瑣な規則に見える理由は、クルアーンが啓示された時代・地域では想定できなかった食品や食生活（豚由来の添加物を含む食品、アルコールを加えて作る醤油など）があり、それらもハラールか否かを問題にするからである。日本で暮らすムスリムがハラール食品を入手する苦労、子どもの学校給食への対応策を紹介し、最近盛んになったハラール認証制度とムスリムによるその批判も紹介する。最後に、日本人がムスリムと共生するためのマナーを考察する。宗教的に生きる人々を尊敬し、日本人とは異なる行動を尊重して容認する必要がある。この寛容を身に付けるには宗教の知識全般と、宗教的戒律の意味や重要性を学び理解することが必要である。

キーワード

イスラーム、食物規範、ハラール、シャリーア、共生のマナー

序

本稿に求められたテーマはイスラームにおける食物規範であるが、イスラームの食物規範はユダヤ教に比べると単純であり、ムスリムが大多数を占めるイスラーム世界では､ムスリムが食事で規範を意識することはほとんどない｡イスラームの食物規範が注目され、ムスリム自身が意識しなければならないのは、ムスリムが少数派である社会、欧米や日本の社会でムスリムが生活する場合である。本稿では、日本で暮らすムスリムが日々の食事に関してどのような問題に直面しているかを見ていく。イスラーム社会に暮らすムスリムの食生活に関して特筆すべきことは、食物規範の遵守の問題よりむしろラマダーン月一ヶ月間の断食と、一日の断食終了直後のイフタールの食事だと思われる。厳密には食物規範の問題ではないが、この点にも少し触れておきたい。最後に、日本社会における多文化共生の問題として、日本人の戒律嫌いと、今後この問題を放置しないために何が必要かを考察する。

イスラームの規範の特徴を説明する前に、宗教学の立場から戒律・律法の意味をどう理解するかを少し説明しておきたい。戒律や律法を苦手とする人々に向けて、本論を理解するための助走にあたる説明である。

現代は世俗化した世界だと一般には言われている。世俗化とは、簡単に言えば宗教離れであり、神、来世、終末など宗教に特有な超越の次元をリアルに感じられない、あるいはそれを否定する。それは科学と合理主義教育の普及と無関係ではなく、近代以後、特に先進諸国（キリスト教欧米社会と日本）では、人々の宗教離れは進んだように見える。だが、宗教は決して完全に消滅したのではない。20 世紀半ばから 1980 年代までは、宗教学・宗教社会学の分野で世俗化論が盛んだったが、イラン・イスラーム革命（1979 年）の頃に、他のイスラーム地域でもイスラーム復興の動きが顕著になり、そしてソ連が崩壊すると、ロシア正教が瞬く間に復活した。東西冷戦の時代には、各地の地域紛争の多くが米ソ代理戦争と見られがちだったが、冷戦終焉以後には地域紛争や民族紛争として、時に宗教間の紛争と見られるようになった。その頃から世俗化論は鳴りを潜め、ほとんど議論されなくなった。

ただし、現代でも、人々が合理的に考える傾向は強く、合理的根拠の不明な戒律は批判的、否定的に受け取られる。食物の禁止についても合理的根拠を求めがちで、合理的説明を模索し推測することも行われている。それは様々な宗教理解の一つの立場には違いないだろう。だが、信仰者にとっては「啓示にあるから」「神の命令だから」が戒律の唯一の正しい根拠であり、それ以外の合理的説明を必要としない。彼らが食物規範を生活慣習として守っている限り、神の実在や啓示の真理性も自明として受け止められている。このような信仰者の立場を事実と

して受け入れることは、宗教学的に信仰者を理解する方法である。この理解は、末尾で述べる共生のマナーにとっても重要である。

もう一点、重要なことは、戒律・律法を強調する宗教と、パウロや親鸞のようにそれを否定する宗教があり、戒律・律法はすべての宗教にとって必須ではないことである。宗教学は神学とは異なる視点から戒律・律法の意義を捉えるので、この相違は宗教のタイプの相違であって、両者の間に優劣をつけない。宗教史を概観すると、戒律・律法を否定する動きは、近代の合理主義や世俗化よりずっと以前に、パウロや親鸞のように信仰心を重視する宗教伝統の内部から生じた。後者の立場では、律法遵守は個人の信仰心の発露やその篤さを示すものではなく、戒律・律法を「形式主義」だと批判したり、練達者には適しても凡夫には守れないものとみなして、その意義を否定的に捉える。戒律・律法を重視する宗教から見れば､それは決して単なる形式主義ではなく､むしろ凡夫のためのものである。宗教学的にみれば、戒律や律法に従う行為は信仰心に基づく行為である以上に、それに先立って、信仰心を涵養する役割を担っている。また、戒律や律法は信仰者の生活様式を定める要因であり、その遵守は宗教的帰属意識（アイデンティティー）の指標となる。これは特に少数派の信仰者にとって重要である。戒律や律法を重視する宗教から見れば、律法遵守は重要な意味を担っている。そのようなものとして、イスラームの食物規範を考察していきたい。

1　シャリーアの特徴

イスラームの食物規範はシャリーアの一部である。シャリーアという語はクルアーンの中で一度だけ使われるが（45:18)、そこでは、神がムスリムに与えた道を意味する。その原義は「水場へ至る道」であり、生命の根幹に至る道、来世で永遠の至福に至る道である。他方、クルアーンには、後のイスラーム法体系の一部をなす法的規範や儀礼規範も含まれているが、クルアーンは法律書でも法典でもなく、その分量はほんの一部である。

ごく簡単にイスラーム法の体系化の歴史的成立を概観すれば、ムハンマドの在世中から、ムハンマド自身が様々な場面で言ったことや行為がスンナとして記憶され、やがてハディースとして記録された。スンナの多くは、ごく初期の信仰者たちの間で生じた紛争をムハンマドが解決した事例や、礼拝や断食など儀礼の詳細なやり方を定めたものもあった。ムハンマドのこういった預言者活動や努力はシャリーアの体系化を目指した活動と性格づけることが可能であり、その活動は彼の仲間のムスリムたちによって引き継がれ､徐々に整えられていった｡やがて、シャリーアはイスラーム法体系を意味するようになった。スンナ派におけるイス

ラーム法の一応の完成は 9 世紀から 10 世紀ごろだと言われている。ここでは触れないが、シーア派にも法学とイスラーム法が別途形成された。クルアーンは共通だが、預言者の伝承録であるハディースは別々に編纂され、法学も多少異なるが、整えられていった。

出来上がったシャリーア体系は儀礼規範と社会規範に大別され、ムスリムの行動全般に関わるものとなった。儀礼規範とは、五つの義務行為（五行）〔信仰告白、一日五度の礼拝、ラマダーン月一ヶ月間の断食、一生に一度、巡礼月のメッカ巡礼、定めの寄付である喜捨〕に関する詳細な規則を定めている。ちなみに、断食は健康な成人の義務であり、妊婦、授乳中の母親、病人、子どもなどは免除される。病気などで断食を免除された人がどのように贖うかも定められている。他方、社会規範は主に婚姻、相続、商取引、訴訟に関する法的規範、その他の道徳規範、さらに食物規範や行儀作法に相当する規範も含まれている。近代的な法律に相当する法的規範はシャリーアのごく一部にすぎず、しかも社会規範と儀礼規範を一つの体系に含む。このような規範体系は、欧米近代の法律と道徳の峻別を基準に考えれば、雑多な規範を未分化のまま集めたもので、前近代的ないし劣った規範体系のように見える。だが、「一人のムスリムが礼拝し、商売も行い、結婚もする」ことに気づけば、ムスリムとして生きる上で必要な行為のすべてを包括する規範体系である。一人の生き方はシャリーアつまりイスラームというただ一つの原則に基づいている。シャリーアの雑多な規範は雑多な行為をしつつ生きる事実に対応し、その体系はむしろ一貫性をもち、その意味で合理的な規範体系である。日本では、キリスト教に改宗しても、長男であれば家の葬儀や法事を仏式で行うことを拒否しにくい。キリスト教と仏教は精神面を強調し、独自の社会規範を展開せず、信者の社会生活は各社会や国家の法律や慣習に従っているため、ときには精神的な信仰と世俗的な社会生活の間に齟齬が生じる。この点を見れば、シャリーアの一貫性の長所を知ることもできるだろう。

他方、シャリーアは義務と禁止のみでなく、儀礼規範、社会規範ともに、規範は 5 段階に区分されている。それは以下の 5 種類である。①義務行為（行うことが義務で、行わないと罰せられる）、②推奨行為（行うことが望ましいが、行わなくても罰せられない）、③行っても行わなくてもいい行為。④忌避行為（行わないことが望ましいが、行っても罰せられない）。⑤禁止行為（行うことが禁止され、行うと罰せられる）。シャリーアは一般にイスラーム法と訳されるが、それが関与する行為の広範囲さと、とりわけ禁止と義務に限定されない点において、法律とは大きく異なる。また最終的な罰は終末の裁きで与えられるゆえに、義務と禁止に関しても、すべてに刑罰を定めているわけではない。シャリーアはムスリムの生き方の指針であり、救済に導く道であり、その規範の五段階の相違はシャリー

アという道の道幅の広さを示すと考えることも可能だろう。義務と禁止が道の両端で、その限界線を逸脱してはいけないが、その間に緩やかな規範の区分がある。特に、道の中央部に相当する「行っても行わなくてもよい行為」は一般的には規範とは呼ばない類の行為であるが、生き方の道幅と考えれば納得できるだろう。日本人はシャリーアに拘束されるムスリムの生活を窮屈だと考えるが、日本人も法律によって拘束されている。しかし罪を犯さない限り、法律に拘束されていると意識することなく生きている。大多数のムスリムも、四六時中シャリーアを意識して窮屈に暮らしているのではない。なお、シャリーアという生き方の道には、礼拝などの五行の義務行為、儀礼行為も含まれており、それらも子供の頃から自然に身につくので、日本人が考えるほど苦痛ではない。

2　ムスリムの食生活

2.1　イスラームにおける食物規範

イスラームの食物規範はクルアーンに基づくが、クルアーンには以下のように、比較的単純な規範しかない。主なものを以下に挙げる。啓示の時期はメディナ期が多く、メディナを中心にムスリムたちのウンマが成立し始めた時期である。

2:168　人々よ、地上にあるものの中許可されたもの（halal）を食べて、悪魔の歩みに従ってはならない。

2:172　信仰者よ、我ら（神）があなた方に当てた良いものを食べなさい。そしてアッラーに感謝しなさい、あなた方が本当に」に仕えるのならば。

5:3　あなた方に禁じられたものは、死肉、血、豚肉、アッラー以外の名を唱え屠られたもの、絞殺されたもの、打ち殺されたもの、角で突き殺されたもの、野獣が食い残したもの、（ただし、この種のものでも）あなた方がその止めを刺したものは別である。

また（ジャーヒリーヤの神々の）石壇に犠牲とされたもの、籤で分配されたもの、これらは忌まわしいものである。…　しかし、罪を犯す意図なく、飢えに迫られた者には、本当にアッラーは寛容で慈悲深いであろう。

5:4　彼らは何が許さるかについて汝（ムハンマド）に問う。言うがいい。「（すべて）善いものはあなた方に許される。

あなた方がアッラーの教えられた仕方によって訓練した鳥獣があなた方のために捕らえたものを食べなさい。ただ、獲物に対してアッラーの御名を唱えなさい。・・・

5:5　今日、良きものがあなた方に許される。啓典を授けられた民の食べ物は、あなた方に合法であり、あなた方の食べ物は彼らにも合法である。…

16:115　彼（神）はただ死肉、血、豚肉、そしてアッラー以外の名が唱えられて屠られたものを禁じられている。だが、欲望や違反からではなく、迫られて止むを得ない者には､アッラーはまことに寛容にして慈悲深くあられる。
≪酒の禁止≫
2:219　かれらは酒と賭け矢について汝に問うだろう。言うがいい「それらは大きな罪であるが、人間に多少の益もある。だが、その罪は益より大である。」・・・
4:43　信仰者よ。あなた方が酔った時は、自分の言うことが理解できるようになるまで、礼拝に近づいてはならない。…
5:90～91　あなた方信仰する者よ、酒と賭け矢、偶像と占い矢は、忌み嫌がわれる悪魔のわざである。これを避けなさい。恐らくあなた方は成功するであろう。
　悪魔の望むところは、酒と賭け矢によってあなた方の間に、敵意と憎悪を起こさせ、あなた方アッラーを念じ、礼拝をするのを妨げようとすることである。…（日本ムスリム協会の訳による。少し、小田による変更あり）

豚肉以外の食肉は、アッラーの名を唱え頸動脈を切断して血を抜く作法で屠殺した食肉がハラールである。クルアーンでは「アッラーの名を唱えての屠殺」が繰り返され、強調されている。それは歴史的にみて、啓示が下されつつあった時期、つまりムハンマドの在世中にはまだイスラームへの改宗を拒否する人々が多数存在したことに関係するだろう。彼らはジャーヒリーヤのアラブ社会で暮らし続け、部族ごとの神々（偶像）を崇拝していた。それゆえ、クルアーンでは、アッラー以外の神々に捧げられた動物の肉を食することを厳しく禁じている。だが、イスラーム共同体が確立され、大多数がムスリムとなった社会では、アッラーの名を唱えることが当然になり、この注意は実際上ほとんど必要なくなったと推測される[1]。再度この問題に関心が向けられるのは、ムスリムが欧米で暮らし始めた時期である。F・ラフマーン（Fazlur Rahman）から聞いた話で、20 世紀半ば、ロンドンに移住したパキスタン人が「ロンドン市内の食肉はアッラーの名を唱えて屠殺されていないから、ハラールではない」として、街角で羊などの屠殺を始めた。衛生面で困ったロンドンの役人がパキスタンのイスラーム法学者に相談し、法学者が「ロンドンで一般に市販されている肉は他の神々に捧げられた肉ではないから、ハラールであり、食べてよい。街角での勝手な屠殺はロンドン市当局により禁止されている」とファトワを出して、一件落着したことがあったそうである。

クルアーンでは飲酒も禁止される。クルアーンで想定されている酒はワインだ

が、その理由は「飲酒が酩酊をもたらし、正常な判断を失わせる」ためなので、同様に酩酊をもたらす他の素材から作られる蒸留酒なども禁止されている。それ以外の食事のタブーはない。このようにイスラームの食物規範はユダヤ教に比べると、はるかに単純である。今日、イスラーム社会のスーパーなどで入手できる食品は、ハラール認証がなくても、基本的にハラールであり、ほとんど規範を気にせず、買って食べることができる。逆に日本人が豚肉を食べたくても、ハラールでない食品は入手できない。

ハラールをどの程度、どのように遵守するかは個人差が大きい。ただ飲酒に関しては、個人差に加え、地域差も見られる。イランやサウジアラビアでは外国人異教徒であっても、公共の場で飲酒できないが、トルコでは都会のレストランにはビールや酒類を揃えていて、非ムスリムの観光客のみならず一部のムスリムもビールを楽しんでいる。トルコが飲酒に厳しくない理由は、歴史的に、小アジアにはビザンツ帝国があり、オスマン帝国以後も、相当数のキリスト教徒が残って共存し、彼らはワインを聖餐式に用い、普段も飲酒していた。カッパドキアでは現代でもワインを製造している。オスマン帝国はシャリーアによる統治を継承したイスラーム社会だったが、第一次世界大戦直後にオスマン帝国が崩壊し、ムスタファ・ケマル（アタ=チュルク）の指導の下でトルコ共和国が成立した。トルコ共和国は世俗主義（ライクリック[2]）を国是とし、日本のような西洋型近代化を目指し、イスラーム的なものを前近代とみなし抑圧した時期があった。トルコの近代化への変革はトルコ革命と呼ばれることもあるが、その中にシャリーアの停止と並び、飲酒を認めたこともあり、飲酒禁止に緩い歴史的背景があったと推測される。

2.2　日本におけるハラール食の問題

日本のようにムスリムが少数派の社会でハラール食を守るには様々な困難がある。この問題は、少数派の民族や宗教者が生活する場合に一般的に生じる問題である。典型的には、離散時代のユダヤ人はキリスト教社会やイスラーム社会で、少数派として自分たちの信仰と律法を維持し続けた。世俗化が進んだ社会でも、特定の宗教規範を遵守することは容易ではない。それは、世俗主義は宗教全般に冷ややかであり、また世俗化した社会も一般に「まったく宗教色のない無色透明の社会」ではなく、多数派の伝統的宗教の価値観や生活様式が残っているからである。

クルアーンにおける食物規範は単純だと述べたが、日本でハラール食を厳守しようとすると、かなり複雑で、煩瑣な規範だという印象をもつ。このズレが生じている理由は、クルアーンではまったく想定されていなかった食品の製造と流通

など食生活の非常に大きな変化にある。クルアーンでは豚肉食および飲酒が禁止されているが、ラードなど豚に由来する成分にも言及はなく、ハムなど食肉加工品にも言及はない。むろん、調味料や製造過程で添加される成分や酒類を加えた菓子にも言及はない。今回、改めて気づいたことは、クルアーンが啓示された時代の食品および食事のあり方と、工場で食品が大量生産され流通する現代との相違である。ハムなどの加工品は保存食として近代以前から製造されていただろうが、今日のように複雑な添加剤は使われていない。基本的に家庭で料理していた時代（日本では半世紀前まで、中東ではまだかなりの家庭がそうしている）であれば、食材も調味料もすべて一目瞭然で、ムスリムが揚げ油やパンの材料にラードを使うことはありえない。だが、今日のように外食や出来合いの揚げ物を買う場合、調理過程でラードが使われたか否か、説明がないと分からない。膨大な種類の食品に多様な食材、調味料、着色料、そして長期保存のための保存剤など多種類の添加物が使われる。かつてインドネシアで問題になったが、人工調味料の製造過程で豚由来の素材が使われていることが分かり、その調味料が禁止された。酒に関しても、酒類を加えた菓子などの食品のみならず、日本の醤油や味噌にアルコールが原材料として加えられることもある。現代では、イスラーム世界でも程度の差はあれ、多くの食品が工場で大量生産される点は同じだが、日本に比べれば、ハラール原材料を使うことが多いと予測され、日本ほどの問題にはなっていないのだろう。このように食品の成分や製造過程が複雑になった結果、それらがハラールか否かを審査して、ハラール認証を与える制度も最近になって盛んになってきている。

現代の日本社会で暮らすムスリムが彼らの食物規範を遵守するのに、どのような苦労があるのか、また最近話題になりつつある「ハラール認証」のもつ問題点についても、朝日新聞夕刊に十回連続で掲載されたコラム記事「ハラールをたどって」（2018 年 6/5 日～6/15 日）を参照しつつ、簡単に説明しておきたい[3]。

新聞連載の内容は、マレーシアからのムスリムの学生を短期間、ホームステイさせた体験談（1 回、6/4 日）から始まり、日本に暮らすムスリムの生活と断食期間の過ごし方（2 回、6/5 日、4 回 6/7 日）、1964 年の東京オリンピックの頃に日本にいたムスリムの生活（3 回、6/6 日）、ハラール食品を求める苦労、子どもの給食の悩みと対応（5 回、6/8 日）などが紹介され、ハラール認証制度の説明と続く。日本では、パンの製造過程で加えるショートニングに豚の脂が使われ、アルコール原料を添加した醤油や味噌も多い。これらの食品はハラールか否かという議論があり、ムスリムの対応はさまざまである。給食では安価なアルコール添加の味噌が使われているが、無添加の味噌を使えば、ムスリムの子供も食べられ、日本人の子供にとっても安全で好ましいと思われるが、これも給食費が高くなる

ため、実現していない。ムスリム家庭では、学校給食のメニュー予定表を入手して、カレーやハンバーグなど、同じメニューを母親がハラール食材を使って作って子供に持たせる。日本で学校給食にハラール食を特別に用意することになった学校があるが、これにも賛否両論がある（5 回、6/8 日）。

さらに、記事はハラール認証制度を説明する。ハラールはクルアーンに見られるが、ハラール認証制度は比較的最近になって盛んになってきた。記事では「2000 年にマレーシアで体系的で厳格な規格が定められ」たが、それはマレーシアに投資を呼び込む目的だったが、認証の取得が巨大なイスラーム市場に参入する足掛かりになるとの理由で急速に発展し、認証制度がビジネスとして発展しつつある（6 回、6/11）。ハラール認証とは、民間団体が調査した上で、その会社の製品（食品など）がハラールであること、飲食店や食品販売店の場合は店全体をハラールと認定し証明する制度である。この検査が非常に厳しく、単に認証を申請した当該の食品だけの素材や製造過程の検査だけではなく、生産工場や作業場でハラールではない素材・物質が使われていないか、さらに、その食品・製品の搬送過程でもハラールではない商品や物質の搬送や積載が混在しているか否かも調べ、すべての項目をクリアできた場合にのみ認証され、ステッカーが与えられる。ハラール認証の取得には、ハラール専用の製造ラインの設置や専用の搬送手段を準備するなど相当な設備投資が必要なのである。記事にある実例では、あるパン屋はムスリムにも安心して食べられるハラールのパンを作ったが、スパイスなども特別に輸入せねばならず、値段が高くなり、ムスリムには買いにくく、一般の消費者にも売れず、ついには店を閉じることになった（7 回、6/12 日）。

最後の 3 回には、ムスリムの多様性、ハラールにこだわるデメリット、ハラール認証制度がビジネスになっていることへの違和感が論じられている。1964 年の東京オリンピックの時代に、タタール人ムスリムのイマームが東京のモスクで毎金曜日に所定の作法で屠殺したハラールの羊肉をムスリムに分かち与えていた。すると、オリンピックの際、依頼があって、ムスリムの選手に提供したこともある。この時代には、まだハラール認証制度はなく、ほとんどの日本人もハラールの知識はなく、ムスリムもラーメンの豚肉チャーシューだけをさけて、ラーメンを食べていたそうである。何をハラールとするかは神が定めるもので、個人差の問題でもある（3 回）。ハラールを厳格に守るムスリムもいるが、信仰心の篤いムスリムだが、出汁や醤油も搬送トラックも気にせず、大半の日本の食品を食べる人もいる。ハラール認証のない食品の多くも、実はムスリムも食べられるものが多い。認証に固執すると、ムスリムだけが日本社会で孤立する危惧もある。最終回では、飛騨のラーメン店が認証をとらず、しかし完璧にハラールのラーメンを提供していると紹介されている（10 回、6/18 日）。

日本では、イスラーム世界と同じ食品を求めることは不可能なので、明らかに豚肉やで飲酒でないなら、こだわらなくてもよいと言うムスリムも多い。日本で一般に販売されている食肉には認証がなく、しかも豚肉と並んで売られている。食肉業者による機械的な屠殺は、厳密な規定の屠殺方法ではない。だが、ロンドン市内の路上での屠殺禁止に関するファトワーが示すように、ハラール認証がなくても、異教の神々に捧げられたものでない限り、食べてもよい。同じ考え方が日本の市販の食肉にも妥当する。記事に登場する日本人ムスリムで、モスクの導師を務める前野直樹は「イスラームの世界では、何がハラールか、ハラールでないかを決めることができるのは神のみ。それを人間が勝手に決めて、もともとハラールである野菜や果物にまで認証を与える行為そのものが、イスラームに反しています」と言う（9 回）。このように、ハラール認証がなくても、ハラールの食品がある。飲酒が人を酩酊させることを理由に禁止された原則に遡って判断すれば、醤油や味噌に加えられたアルコールで酩酊しないのであれば、使ってもよいという解釈も可能だし、実際、多くのムスリムがそれらを使っている。他方では、ハラール食の遵守には個人差が大きく、日本を旅行中であっても、頑固に故郷と同じ基準の食生活を続けようとする人もいる。

2.3　断食（サウム）と犠牲祭

ムスリムが少数派であるような社会で食物規範を遵守することには苦労が伴い、それだけに、その遵守が個人の信仰心を意識させ、あるいは信仰を涵養するのに役立つが、イスラーム社会で暮らすムスリムにはその苦労がなく、周囲の人々で同じ食生活をしているため、その遵守が個人の信仰心を意識させることも少ない。彼らにとっては、断食や犠牲祭が食事（食事に恵まれていること、人間にとって食べることの意味）を意識させる重要な場面であると思われる。厳密な意味での食物規範ではないが、これについて簡単に触れておきたい。

イスラーム暦ラマダーン月 1 カ月間、日昇から日没までの間の断食が五行の一つであり、健康な成人ムスリムの義務行為である。イスラーム暦は太陰暦であるため、断食の時期は一年ごとに早まり、季節は冬から秋、秋から夏へと移りゆく。冬は日昇は遅く、日没は早いため、断食は比較的楽だが、真夏の断食は時間も長く、暑さも厳しいため非常に苦しい。ちなみに、日昇と日没時刻は同じ国内でも地方ごと、地域ごとに異なる。普段の生活は各国の標準時で統一されているが、断食の開始と終了時刻は各市町村ごとに当地の日昇と日没時刻に従い、同じ場所でもラマダーン月一ヶ月間に、日昇時刻も日没時刻も日々変化し、断食の開始・終了時刻もそれに従って変化する。ラマダーン月一ヶ月の特別なカレンダーが配布され、そこに一日ごとの開始と終了時刻に加え、礼拝時刻が印刷されている。

宗教的戒律のほとんどない日本人には、多くのムスリムが断食を遵守することが理解しにくい。だが、イスラーム社会で生まれ育つ子供にとって、大人は一年のある時期に断食することが当然の生き方として刷り込まれるため、日本人が想像するほど行いにくいものではない。断食の義務は、身をもって飢餓の苦しさを知ることで、飢餓に苦しむ人々に共感し、助けようとするからだという。断食は決して容易ではないが、新聞記事に、あるムスリムは「神が見ていると思うと、頑張れる」「神に自分のいいとことを見て欲しいと思って耐える」と述べている（2回、9回）。何歳から断食に参加するかは、各家庭によって異なり、子どもは朝から昼までの半日の断食をする場合もある。また、病人、妊婦、授乳中の母親など、様々な理由で断食の免除規定もあり、免除された場合、その補いの断食や寄付などもシャリーアの細則で定められている。

断食が終わる日没時刻に、トルコではモスクのミナレット（尖塔）に明かりが灯る。それを合図に、ムスリムたちは水を飲み、イフタールという断食明けの食事を始める。その夕食には親戚、知人、友人、近所の人々を互いに招きあって、普段より豪華な食事を楽しむ。各地で、旅人や貧者のためにイフタールの食事が準備され、振る舞われる。イスタンブルのスルタン・アフメット・モスク（ブルー・モスク）前の広場には、1000人分以上の食事が毎日、用意される。この材料費と調理や片付けは個人や企業、ムスリムからの寄付を運用する財団などが出資し、多くのボランティアが調理や給仕を手伝っている。

「神が見ているから頑張れる」という言葉が示唆するように、断食月は人々が普段の礼拝以上に、アッラーを身近に感じる場であり、特に宗教的な時間なのである。それが儀礼のごく一般的な意味でもある。毎日五度の礼拝を行い、様々なシャリーアの規範を遵守しているムスリムは、その日常生活が充分に宗教的だが、ラマダーン月の断食が彼らにとって特別な時間、より限定した意味での儀礼の場、聖なる時間であると言えるだろう。食事との関連でも、断食の苦しさとイフタールの食事の楽しさが食事できることの有り難さを意識させ、神への感謝を強く意識させる。この意味で、イスラーム社会に暮らすムスリムには、食物規範より断食という儀礼行為、それに関連する一連の食事などの様式こそが彼らの宗教意識を高揚させる。

犠牲祭（イード・アル・アドハー、トルコ語ではクルバン・バイラム）もやはり年に一度の特別な儀礼の日であり、食の原点を自覚させる場でもある。犠牲祭は巡礼月の最後に、巡礼者はメッカで犠牲をささげ、他のすべてのムスリムも居住地で羊やラクダ、時には牛を犠牲にし、その肉を貧者や知人に分け与える。屠殺はトルコではイマームと呼ぶモスク管理者とボランティアが手伝って行う。手際よく肉の塊にして、犠牲獣を持ち込んだ人に手渡す。私も学生から「自分の家

で犠牲にした肉です」と言って分けてもらったが、普段スーパーで買い求める肉と異なり、スジが残っていて硬かった。しかし、私が目にした羊とは異なるとはいえ、屠殺を見た後では、普段食べている肉も魚も、まさに命を奪って食べるという事実と向き合うことになり、無駄にしてはいけないという思いを強く感じさせた。食の原点を一年に一度、まざまざと目にすること。これもまた人間が生きることの原点、食事の意味を考えさせる場である。近代以前、特に遊牧民や農村では各家庭で自分たちの食べる鶏や羊を屠殺していただろうが、肉もすべて産業化されて入手する現代において、犠牲祭は現代の都会の消費者に食生活を教える貴重な場を提供している。

3　日本人と宗教規範（戒律・律法）—共生のマナーのために

今日、共生を問題にするなら、他宗教や異民族の人々との共生だけではなく、LGBT や障碍者との共生も含まれる。誰との共生にも共通することは、相手を尊重する心と態度をもって接することだが、無理をせず、気負いすぎないことも大事である。相手と自分は違う。この相違を互いに認めて、異質な他者との共生を実現しなければならない。未知の存在、良く知らない異文化に属する人々に対して「怖い」という感情は自然だろう。だが、この感情のままでは相手を尊重できない。この感情の克服は容易ではないが、相手を知ること、相手の立場や状況、相手の文化や宗教の知識が必要である。分からないことは相手に質問すればいいのだが、日本人は質問することが苦手で、失礼だと思っている。日本で子育てをしたユダヤ人の母親が、「子どもの学校時代、親たちからユダヤ教について質問を受けたことがない。質問されれば、喜んで答え、説明できるのに」と嘆いていた。日本人は自分が自分の宗教について質問されることが嫌で、相手もイヤだろうと忖度している。思想信条などの個人情報を質問してはいけないと教えられているかもしれない。「それを聞かない、知らないから差別しない、共生できる」ことは真の意味で相手の思想信条を認めていない。真の共生とは、互いの相違を知的に理解して、一緒に行動できない面を容認しあった上で、感情や偏見による差別と排除に陥らず、共生することである。

ここで、イスラームのように戒律の厳しい他宗教の人々との共生を実現するために必要なマナーに焦点を絞って考えておきたい。日本人の多くは「自分は無宗教で、キリスト教徒ではないのに教会で結婚式をするように、万事いい加減で、他宗教には寛容だ」と思いこんでいる。だが、戒律や律法に拒否感が強く、戒律の厳しい宗教に寛容ではない。初詣、神社の祭り、合格などの諸祈願、葬儀や法事、墓参のすべてが宗教行為だが、大半の日本人はそれらを社会的慣例として行っ

ていて、「宗教」とは認めない。「宗教」とは自分とは無関係の怪しいカルトや、自分には馴染みのないイスラームのような信仰と儀礼だと思い込んでいる。何よりも日本では宗教について語る習慣がなく、質問されても答えられないため、大半の日本人は宗教に関する質問をするのもされるのも嫌う。この傾向を宗教アレルギーと名づけるが、実は宗教に関する「言挙げ」を嫌うことも古代の日本宗教に由来する文化で、問題の根は深い。

日本の教育水準の高さを考えると、日本人の自他の宗教に関する知識の低さが目立つ。それは、現代の日本では学校教育における宗教教育が不十分で、しかもその乏しい知識が教義に偏り、儀礼や生活様式をほとんど教えていない[4]。そのため、イスラームやユダヤ教には食物規範があり、宗教によって食べられない食品があるといった知識を学ぶ機会がない。また、仏教は出家者には厳しい修行があるが、日本仏教は在家信者にほとんど戒律を課さない。神道にも厳しい戒律がないため、日本人は戒律・律法に馴染みがなく、戒律嫌いが多い。この戒律嫌いは、イスラームなどの知識によって是正することができるが、日本の宗教教育ではその機会がない。

他方では、宗教教育の場は家庭でもある。世界中どこにおいても、伝統宗教の実践的教育は各家庭で行われ、世代間伝承で継承される特徴をもつ。日本の場合、初詣や墓参など行為面では伝承されているが、言語化された宗教（聖典の知識や教義）はほとんど伝承されていない。それは、神道が古代宗教で、聖典も明確な教義体系も持たないことにもよる。加えて、仏教には聖典も教義もあり、基本的には個人の宗教で、個人の悟りや救済を説く宗教だが、祖先崇拝は仏教教義にはない。だが、今日、多くの日本人に身近な仏教はときに「葬式仏教」と呼ばれるように、個人の信仰に基づき仏典と教義を学ぶ宗教であるより、葬儀と法事など死者儀礼を行う家の宗教である。これは江戸時代の寺請制によって「家の宗教」として制度化され、今日まで定着している。死者儀礼の内実は神道と儒教とが混交した祖先崇拝であり、仏教の公的な教義では説明しきれない。それゆえ、葬式仏教では公的教義を丁寧に教えていないため、大半の日本人は家の仏教として法事や墓参を行うが、仏典の知識も乏しく、各宗派の教義にも詳しくない。

日本人は世界の諸宗教の知識があまりにも乏しく、現代の世界でも宗教が現に生きた伝統であり、宗教的に生きることが現代人にもむしろ当然であって、奇妙なことではないことが教えられていない。しかも、現に日本人が参与している宗教行為（初詣、祖先崇拝、墓参など）が単なる社会的慣習だけではなく、宗教でもあることが、宗教教育で正確に説明されていない。宗教についての基礎理解が不足しているゆえに、自分たちの日本的宗教を言語で説明できないのだが、それは日本人が自分たちの宗教的帰属意識（アイデンティティー）を言語化できない

ことであり、安直に「自分は無宗教だ」と言ってしまうのだろう。

日本人の宗教的帰属意識の問題は、日本に神道と仏教が完全に融合するのでもなく、並列して存続しており、大半の日本人は双方に属する。ジョゼフ・M・キタガワによれば「宗教の分業」状態にあるため、宗教学でも必ずしも日本人の宗教を適切に説明していない[5]。まだきちんと論証できずにいるが、日本社会の同調圧力の強さは、おそらく、日本的宗教帰属意識と関わっているだろうと、私は推測している。同調圧力とは、日本人は神を畏れないが、他人の目を恐れることを意味する。この同調圧力が、他宗教の人々が日本人とは異なる行動をとる、とらざるを得ないことを嫌う原因の一つだろう。新聞記事の中に、母親が子どもの給食のメニューを調べて同じ料理をハラール食材で作って持たせることが記されていた。記事には何のコメントもなかったが、なぜ同じ料理でなければならないのか。弁当を許可するなら、異なる料理を持参してもいいのではないか。特に、母親がフルタイムで仕事をしていれば、同じメニューの料理を持たせるのは負担が大きすぎて無理だろう。子ども自身が同じ料理を求めるのか、級友が異なる料理だと文句を言うのかもしれないが、いずれにしてもここに同調圧力を感じる。ハラールを厳格に遵守すれば、子どもが誕生会などに誘ってもらえず、孤立するのではないかという心配もあった。この点も、誕生会には参加できなくても、友人関係は変わらないとするか、誕生会にも自分だけの食事を持参して参加できるようにして、デザートなど一緒に食べられるものは一緒に食べればいい。何もかも一緒でなければというところに、同調圧力が働いている。そのことをムスリム家族がどう感じているのか、新聞記事には何も書かれていなかった。ムスリムとの真の共生を根付かせるためには、互いの違いを認めて、一緒にできないことがあることを認め合うことが必要だと思われる。

グローバル化が進む現代において、日本人もイスラームやユダヤ教およびヒンドゥー教のように戒律や律法を重視する宗教、つまり生活様式の異なる人々との共生に慣れていかねばならない。他宗教への寛容とは、「心の中で何を信じていてもいい」だけでは不十分で、儀礼や食事といった行動面、生活様式における相違を理解して、相手の宗教的な生き方に敬意をはらい、その行為を尊重することである。他宗教の人々を尊重するには、宗教が人間にとって基本的で重要なことであると理解して、宗教を侮蔑しないことである。その上で、考え方の相違と行動様式の相違は、感覚的には共感できない、同意できないとしても、相手にとっては大事なことだと知的に理解することで容認する。そういう態度を学ぶことである。このように宗教に寛容な態度を身に付けるには、日本人が自分たちの宗教についても、今よりは深く理解し、相手にも説明できることが求められてくるだろう。日本人が苦手とする宗教についての言挙げをどこかで始めなければならない

時代になっている。

注

[1] 啓示が下っていた歴史的状況を文脈として意味を解釈する方法が歴史的解釈であり、歴史的状況の変化に対応しやすいリベラルな解釈である。他方、一切の文脈を無視して啓示の字義に忠実に解釈すれば、いかなる状況でも屠殺方法はアッラーの名を唱えねばならないと解釈される。

[2] ライクリック（laiklik）は、フランス語のライシテをトルコ語化した造語。しかし、伝統的に教会制度の存在しないイスラーム世界で、政教分離を国是としたところで、トルコ共和国が教会を創設して国家と分離することもできない。この世俗主義とは、政府はフランス法をモデルに近代国家法体系を導入し、それによる統治を行い、シャリーアによる統治を行わないことを意味する。ただし、イスラーム信仰は個人レベルで保持され、シャリーアも儀礼規範、食物規範など生活様式では効力を持ち続け、さらに家族法は国家の法律と二重規範のように、シャリーアによる家族法も一定の効力を今も保っている。なお、最近のトルコ情勢はエルドアン大統領の政党が親イスラーム主義で、イスラーム主義に傾いていて、飲酒の禁止などシャリーア遵守が強まっている。

[3] 日本に暮らすムスリムの研究は最近、増えつつある。たとえば三木英・櫻井義秀編著『日本に生きる移民たちの宗教生活―ニューカマーのもたらす宗教多元化』（ミネルヴァ書房、2012 年）では、第八章「ムスリムと出会う日本社会」（沼尻正之、三木英）で日本にあるモスクの建設とあり方を中心にムスリムの生活と、近隣住民との関係が調査されている。堀江宗正責任編集『日本の宗教事情　国内編 I 』（シリーズ「いま宗教に向き合う 1 」（岩波書店、2018 年）でも、第十章「滞日ムスリムと日本の地域社会」（沼尻正之、三木英）が含まれている。ただ、ハラール食に関しては、新聞の連載記事が具体例に富んでおり、それを用いる。

[4] 藤原聖子『教科書の中の宗教―この奇妙な実態―』（岩波新書、2011 年）参照。日本の高校の倫理や歴史の教科書で、日本および世界の宗教がどのように説明されているかを事例を挙げて考察している。

[5] Joseph Mitsuo Kitagawa, *The Religions of the East*, The University of Chicago Press, 1959 参照。宗教の分業とは、多くの日本人が神道と仏教、（キタガワはそこに儒教を加える）など複数の宗教に属して、矛盾に感じることはない。そして、時と場合に応じて神道と仏教を使い分けていることを言う。